
カゲロウデイズ 小説にしてみた

くろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カゲロウデイズ 小説にしてみた

【Nコード】

N6829Z

【作者名】

くろ

【あらすじ】

主人公 悠斗 （ゆうと）

ヒロイン 礼奈 （れいな）

これ以上の登場人物は出ないと思います・・・
あ。でるときもあるかも

夏（前書き）

初めまして。くろと申します。連載小説ははじめて挑戦します。

今回書くのは私の大好きなボカロ曲「カゲロウデイズ」と「ヘッドフォンアクター」

という歌を小説にしたものです。

駄文、乱文でも全然かまわないという偉大なお方はどうぞ最後までゆっくりしてってください。

批判、中傷的なコメントは控えてください。

アドバイスをくれるなら尻尾振って喜びますw

夏

8月15日午後12時半頃

病気になるいそうなほど天気がいい
日差しが肌に突き刺さって痛い。今日はどうやら最高気温を更新するようだ

悠斗は公園のブランコに座ってちらつと携帯を見た

「ねえ悠斗？話し聞いている？」

「お、わりい。聞いてなかった」

悠斗の隣のブランコに座っているのは彼女の礼奈

2人は去年の秋から付き合っている。

元々仲がよかった2人がさらに距離を縮めるのにはそう時間はかからなかった

悠斗も礼奈もこうなることを心のどこかで望んでいたのだろう
付き合い始めて半年経つ今日。

どこかに行くわけでもなく、いつもの公園でただ2人で駄弁っていた

「にしても今日はホントに暑いな・・・」

悠斗は着ていた半そでを捲り上げてで自分をあおいだ。

生ぬるい風が逆に気持ち悪い

しかし、悠斗はそんな夏が大好きだった。夏休みもあるし、いろんなところに遊びにいける。

宿題があるのが最大の難点だが、それさえ乗り越えてしまえば楽しいことしかない

それに礼奈との思い出を増やす絶好のチャンスだ
そんなことを考えていると自然と頬が緩み口元がにやけてしまった

「悠斗ったら何にやけてるの？」

「いや、なんでもねえよ」

「どーせ悠斗のことだから夏休み早くこいとか、どこかに遊びに行きたいって思ってたんでしょ？」
顔に書いてあるよ」

的を射たことを言われ、悠斗はつい苦笑いになった

「ばれたか」

「当たり前でしょ」

礼奈は得意げに笑った
礼奈の笑顔は綺麗だ。筋の通っている鼻や、大きな瞳。そして小柄で色白ときたものだ。
かなりの美人になるだろうと近所のおばさんたちは礼奈を見るたびに言った。

夏（後書き）

うーむ・・・最初っからaaaaaで申し訳ないですorz

もう1人

ふと足元を見ると黒猫が礼奈の足元に擦り寄ってきているのが見えた

「猫！かわいい！！」

猫が大好きな礼奈はすぐさま抱き上げて膝におく。

礼奈はかわいいものには目がなかった。

キラキラしたものやあまり派手なものは好まないが
程よい可愛さのものには目がない

猫もゴロゴロのどを鳴らしながら礼奈の膝の上で眠ろうとしている
悠斗はそれを嫌悪の目で見つめていた

猫は好かないのだ。猫か犬かとき枯れたすぐに犬と答える

小さいとき大きな猫に追いかけられた記憶があるのだ
いまだにトラウマでよく礼奈にバカにされた。

「でもまあ、夏は嫌いかな」

礼奈は猫をなでながらふてぶてしく呟いた

「え？何で？」

「のどが無性に渴くから！」

礼奈は子供っぽく笑いながら自動販売機を指差した
ずっとのどが渴いていたのだろう

「仕方ねえなあ・・・何がいい？」

「一緒に行く！」

しぶしぶ立ち上がった悠斗に対して礼奈は猫を抱きかかえたまま嬉しそうに立ち上がった。

「猫置いてけよ」

悠斗は少しビクビクしながら猫を指差した

「いいじゃん。かわいいんだからさ。あっ」

猫が勢いよく礼奈の腕の中から飛び出した

「まってよー」

礼奈も跡を追う。悠斗はただその光景を眺めていた
猫は道路の方に逃げた。礼奈も跡を追う

おい、もう道路だぞ??!

「礼奈!!」

叫んだときにはもう遅かった。赤に変わった信号機

ドンという鈍い音が町に響いた。トラックが一人の少女を引きずって泣き叫ぶ

生で見る血飛沫の色はかなり赤くて、リアルで・・・
血の匂いが鼻を突き刺す。気持ち悪い・・・

「あ・・・れ・・・いな・・・嘘だよな・・・?」

悠斗は口をおさえてがたがたと振るえていた

「クスクスッ・・・嘘だと思う?」

「え?」

ふと横を見ると俺と同じ顔をしている男がいる。
嘘だ。礼奈が死ぬなんて俺は信じない。

「嘘じゃないぞ」

蝉の音がうるさい夏の出来事。

血の匂いで気持ち悪くなった悠斗の意識が朦朧としてきた
もう前が真っ暗・・・

それなのになぜかもう一人の自分が笑っているのははっきりと分かった

夢（前書き）

ホントに文がめっちゃくちゃで・・・ごめんなさいorz

夢

ハッと気付いて目を覚ますといつもの見なれた天井があった
なんだ・・・やっぱり夢か・・・

内心ほっとした悠斗は大きな伸びをして、手元にあった携帯を開いた
8月14日の午前12時過ぎくらいをさそうとしている
テレビをつけるとお昼のニュースが始まっていた

「8月14日、お昼のニュースをお伝えいたします」

テレビ画面に映った若い女性アナウンサーの透き通った声が耳に滑
り込んでくる
とても聞きやすい

「やべっ・・・公園行かなきゃ・・・」

悠斗は外に飛び出して公園に向かった
暑い。何もしてなくても汗が出てくる
それなのに走っているから尚更汗がでてる
Tシャツが背中に張り付いて気持ち悪い
さらにこんな暑い日にはいつも煩く鳴いている蝉も今日はかなり煩い
まるで壊れたラジオのようだ
悠斗はなんとなく、この蝉のどこかで聞いたような気がして思わず
足を止めてしまった。

「まいつか！」

悠斗は再び足を動かした。たいして気にもとめず

「礼奈」

「あ、悠斗！」

礼奈は公園のブランコに座っていた。その膝の上には黒猫。

「うわ・・・」

悠斗は思わずあとずさってしまった。
猫は嫌いだ。

「なによー。失礼じゃない」

礼奈はふくれつつらで悠斗を睨んだ

「そうかー？そもそもこんなふさふさな毛とか暑いだろ？」

「いいの！こんなに暑い夏が悪い」

「夏のせいにするなよ」

礼奈の口元が緩み笑顔になる。悠斗もつられて笑顔になったが
すぐに強張った表情に戻った

ついさつき見た夢を思い出したのだ

確か夢でもこの公園に礼奈と2人でいて、その黒猫もいた
それでその猫が礼奈の腕から逃げ出して、礼奈は跡を追いかけた
それで・・・道路に飛び込んで・・・

悠斗の額の汗はいつしか冷や汗に変わっていた

「悠斗？なんか顔色悪いよ？」

礼奈は心配そうに悠斗の顔を覗き込んだ

「あつ、おう・・・平気」

無理矢理笑顔を作ってしまった。やはりその表情は硬い
礼奈は不服そうに頷いた

「ふうん・・・ならいいや。あつ」

黒猫がまたしても礼奈の膝の上から飛び降りた。道路に向かっている
もしまた轢かれたら・・・
そう思うと悠斗は反射的に礼奈の腕を掴んだ

「悠斗？」

礼奈は驚いたのか素っ頓狂な声をあげた

「もつさ・・・今日は帰ろう」

悠斗はのどの奥からかすれた声を出した
蝉の声にかき消されそうなほど小さな声

夢（後書き）

中途半端で大変申し訳ない!!!
頑張って更新していくので・・・orz
ごめんなさい・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6829z/>

カゲロウデイズ 小説にしてみた

2011年12月25日12時54分発行